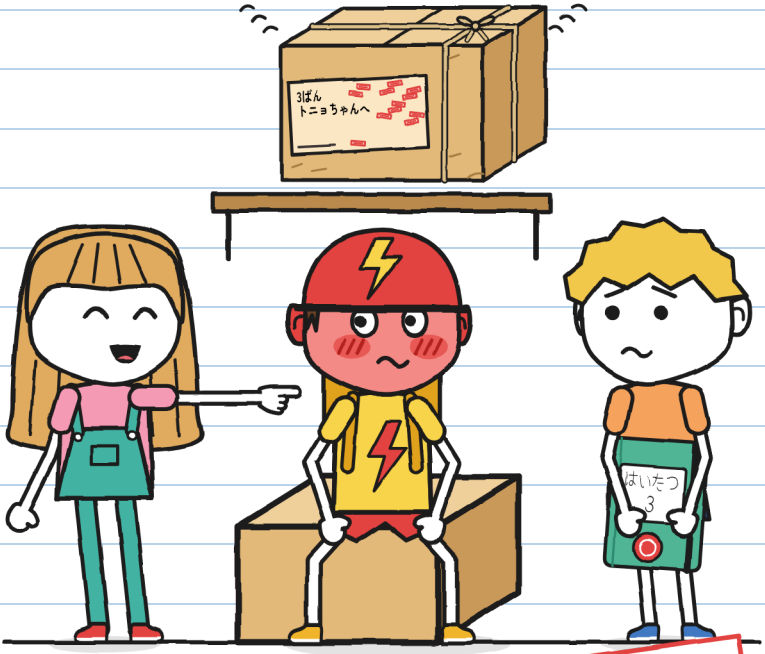
ありえない はいたつ・3

へんそう おねがい

LinguAula



（グニの ノート）

サイズ L
上級・11+

ありえない はいたつ・3
へんそう おねがい

文と絵：LinguAula

サイズ L・上級・11+

日本語版：LinguAula

初版：2026

© 2026 LinguAula · info@linguaula.com

自由にコピーして、学校でも家でも使えます。

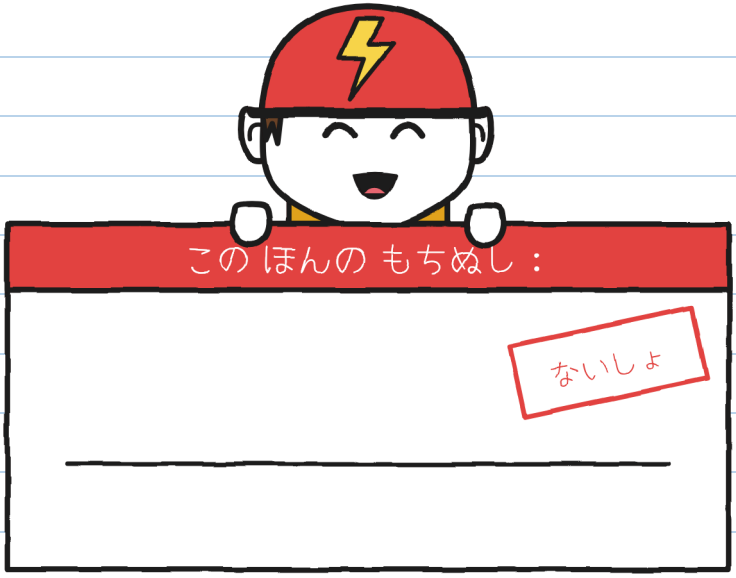
シリーズ第3作。前の2作：『このにもつは かみつく』『かみなり前に あけるな』



LinguAula

linguaula.comで しょうごとに れんしゅう

この本のしっぴつちゅうに、ケガをした配達員は一人もいない。
まっ赤になった人は、いる。 —J.



そして さきに よむのは わたし。 —J.

見つけたら、もどしてください。おねがいします。

おはなしの なかだけ

このはんこは、おはなしの中だけで起こることのしるし。本物の荷物は飛んでもどったりしない。本物の自転車に乗るときは、76ページのとおりに。 —J.

だれが だれ？



グニ。どようびの はいたつやさん。だれも たのんで いない ものを かく。この ノートは グニの。



フリータ。みどりで かいて、「J.」と サインする。いつも たすけかたを しって いる。それが もんだい。



トニョ。じてんしゃで イナズマびんの はいたつを する。じっぷんで とどかなければ タダ。あかく なるのは ぶぶんごと。



マラさん。「ありえない はいたつ」の てんしゅ。まじょの ぼうしを かぶって いる。いうより ずっと おおくを しって いる。



ゾーイ。イナズマびんの 人。いちばん はやい。あだなを つける 人。



ブルーノ。イナズマびんの 人。1かい パンクした。2ねん まえ。



3ばんの にもつ。うごかすと なる。ラベルには なまえが ひとつだけ。

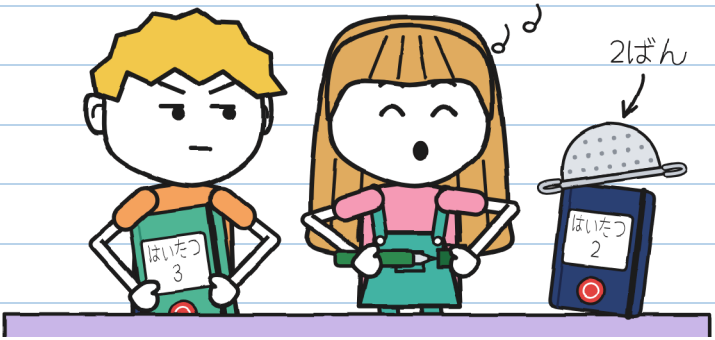


R.は、だれにも とどけられない にもつを おくるひと。その なまえを だれも いわない。

グニの
はいたつノート3

ないしょ。

「ないしょ」は、先に読むこと。だれにも言わない。 —J.



ノート2は、たった一回のあらしで使いきった。これは緑色で、店のはんこ入り。ぼくが一番に使うはずだったのに、使いはじめたのはフリータだった。

助けるために先に使ったの。どういたしまして。 —J.

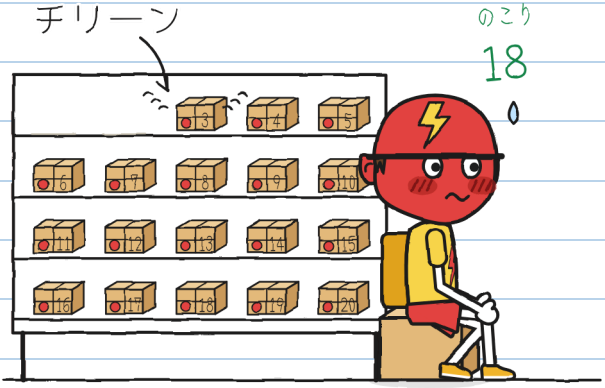
ぼくはたのんでいない。でも、フリータには関係ない。

第 1 章

チリーン

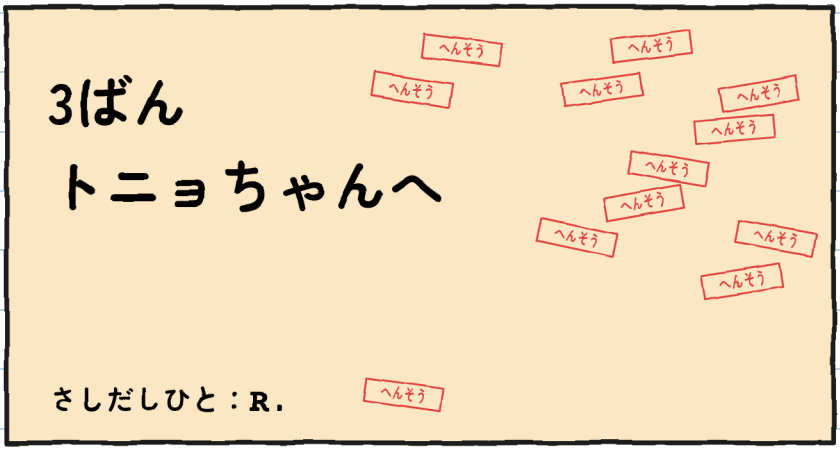
マラさんの店には、だれにもとどけられなかった荷物のたながある。二十こあった。フリータとぼくは、ドラゴンのたまごと走るたねをとどけた。のこりは十八こ。

あらしの夜、もううちへ帰ろうとしていたとき、そのうちの一つが鳴った。
チリーン。



3番だった。十分でとどかなければタダのイナズマ便で働くトニョが、ヘルメットと同じ色になった。

もどってきた荷物とは、かならずもどってくる荷物のこと。受けとった人がラベルにきえないインクでサインしなければ、夜明けにたなへ飛んでもどる。おくってくるのは、いつも同じ人。R.だ。



フリータはラベルを読みはじめた：
「トニョちゃ……」
フリータは口をとじた。フリータは、ことばのとちゅうでだまったりしない。ぼくはトニョを見て、わけがわかった。

半分だけ読んだ。あとの半分は飲みこんだ。 —J.

いきなりまっ赤になる人もいる。トニョはちがう。トニョは部分ごとに赤くなる。ぼくは書きとめた。

トニョの あかメーター



「その荷物は、まてる」とトニョはものすごい早口で言った。「何年もまってるんだろ？　じゃあ、あと一日。十日でもいい。イナズマ便はいそがない」

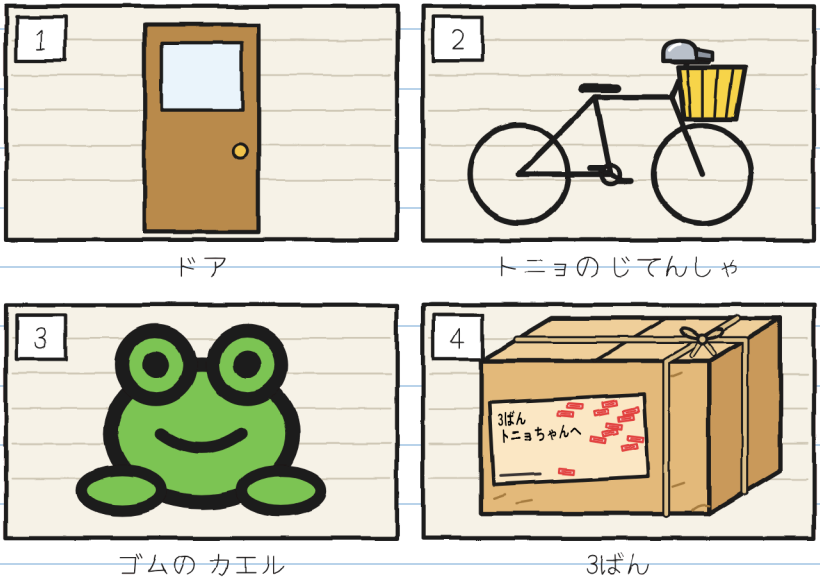
イナズマ便がそんなことを言うのを聞いたのは、これがはじめてだった。

その夜：4。赤で書きたかった。でも、持っているのは緑だけ。　—J.

「今夜は何も開けない」とマラさんは言った。「たなには勝手にさわらない」
だれもさわらなかった。なのに、また鳴った。
チリーン。
「ドアだよ！」とフリータは言った。

わからないことがあると、ぼくはリストを作る。

チリーンの ようぎしゃ



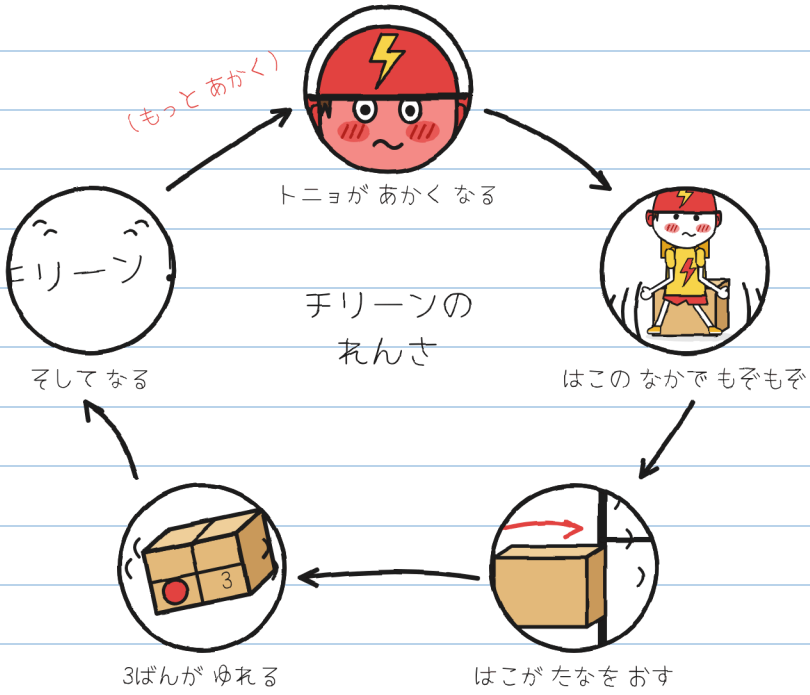
カエルは悪くない。わたし、知ってるから。 —J.

ぼくはたしかめに歩道に出た。もう雨はやんでいた。
ドアを開けてしめた：ギィー。トニョのベルをならした：リンリン！　カエルをおした：キュッ。



中ではフリータが指をふって「ちがう」と合図していた。どれもちがった。
ぼくはまた中に入った。トニョが箱の中で身じろぎした。
チリーン。

ぼくはしゃがんだ。トニョの箱が、たなの足にもたれかかっていた。



まほうじゃない。トニョだった。
3番の中には、動かすと鳴るものが入っている。

わたしと同じ。 —J.

トニョはじっとしていることに決めた。それがもったのは、これだけだ：

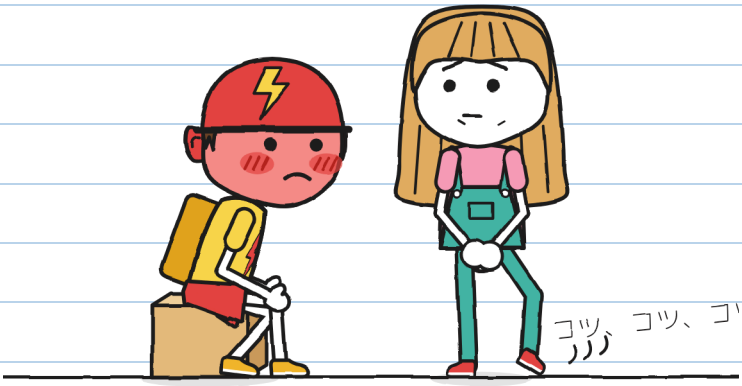


ただ聞いただけ。聞いただけで、たなはおせない。 —J.

この一言は、おした。

「ぼくのことだ」とトニョは、自分のスニーカーを見ながら言った。「小さいころの」
あまり小さい声だったので、カエルのほうがぼくよりよく聞こえたはずだ。

フリータは口を開けた。しつもんが行列をつくっているのが、ぼくには見えた。それから、まだスニーカーを見ているトニョを見て、口をとじた。



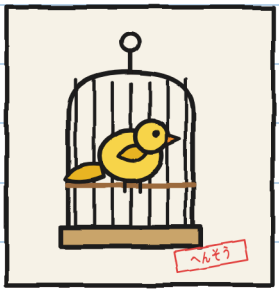
「もうきかない」と言った。
がまんするのは大変だった。足に出ていた。

聞かなかったことは九こ。ぜんぶ書きとめてある。 —J.

「どうして一度もとどけなかったの？」とぼくはマラさんに聞いた。

「十二回持っていったよ。ラベルを見てごらん。通りの名前も、番地も、名字もない。見つけたトニョちゃんは、ぜんぶ試した」

マラさんの トニョちゃんたち



1. カナリア。
（ラベルを ふんだ。ダメ。）



2. アントニオさん、71さい。
（「そうだと いいんだけどね」）



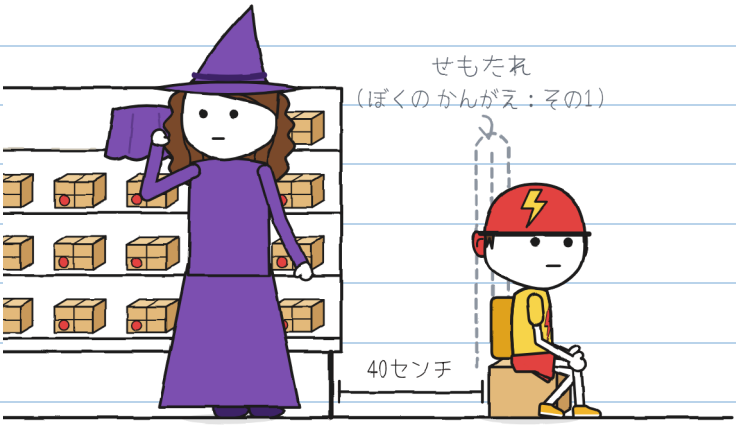
3. うんがの ボート。
（てが ない。）

「トニョは？」とフリータが聞いた。

「この前やってみたときは、まだトニョを知らなかった」とマラさんは言って、トニョを見た。「それに、小さいころなんとよばれていたのか、だれも教えてくれなかった」

マラさんはカウンターの下からむらさき色のぬのを出して3番にかぶせた。オウムをねかせるときに、かごにかけるみたいに。そのあと、トニョの箱をたなから40センチ遠ざけた。

「これでいい。好きなだけ動いていいよ」



トニョは自転車で帰れたはずだ。ドアのところにある。

10分で町の反対のはしまで行けた。

トニョはまたすわった。

なぜかはわからない。でも書いておく。トニョの箱にはせもたれがないから、ぼくが一つかいた。

だれもあなたに、せもたれなんてたのんでいない。 —J.

店をしめるとき、トニョは最後までのこって、ヘルメットをとめていた。
「マラさん。あした、あの荷物のことで話しに来る。ほかの人に聞かれない所で」
「この二人は店の人だよ」
トニョはぼくたちを見た。
「この二人ならいい。でも、イナズマ便の人はだめだ」



チリーンの持ち主は、もうわかった。あとは、その持ち主がそれをほしがるかどうかだ。

どうすれば助けられるか、わたしにはもうわかっている。 —J.

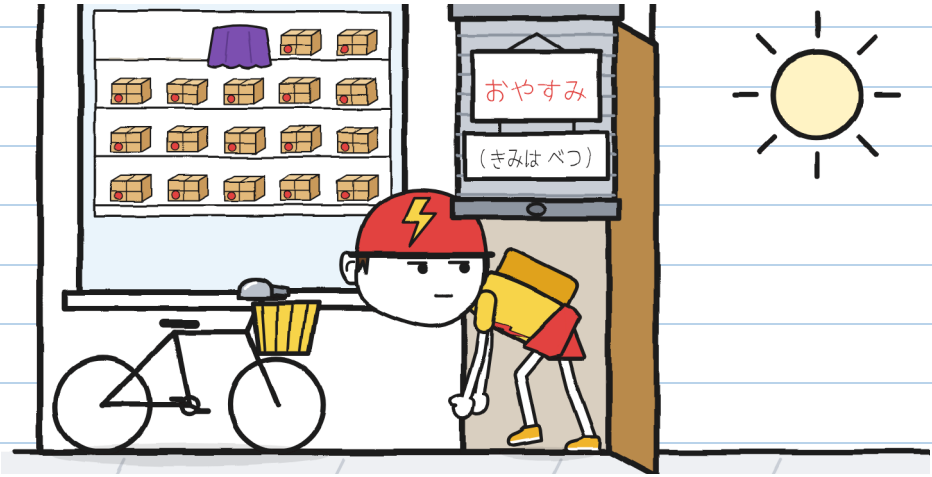
それがぼくは心配なんだ。

第 2 章

いいとは いって ない

日曜日は店が休みだ。マラさんはシャッターを半分だけあげて、はりがみをした：おやすみ（きみはべつ）。

トニョは十一時に来た。入る前に道の左右を見た。道をわたるときのように。イナズマ便の人は、だれも来ない。



わたしたちは十時半に来た。念のためにね。 —J.

マラさんは3番をカウンターにおき、ぬのをとって、はりがみでも読むように言った：

「3番の荷物。トニョちゃんあて。あなたのこと？」

「ぼくのことだった」

「それでいい。ほしい？」

トニョは箱を見た。箱はなにも言わない。

「いいとは言ってない」

「いやだとも言ってない」

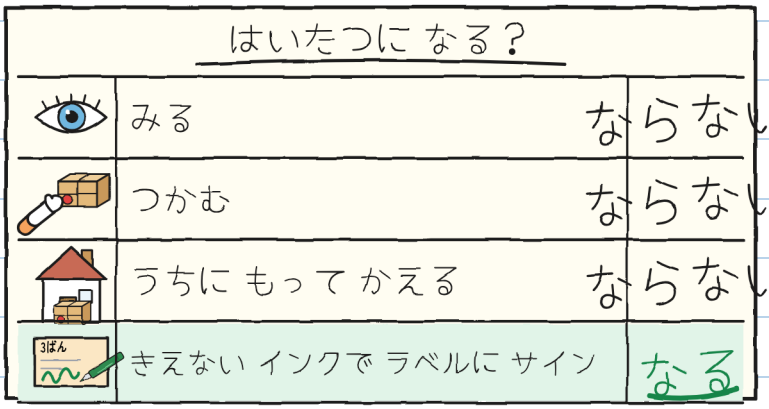
「いいとは言ってない、と言ったんだ」



サインしないためのセリフが三つ。数えたよ。 —J.

トニョは箱を、やけどしそうな小なべを持つようにつかんだ。重さをたしかめ、まわし、耳に近づけて、そっとゆらした。
チリーン。
トニョはあわててはなした。

「もしトニョが荷物を家に持って帰ったら？」とフリータは言った。「荷物が受けとった人の家でひとばんねたら、もうとどいたことになる。りくつの問題だよ」
「へんそうのはんこは、りくつじゃ決まらない」とマラさんは言った。「インクで決まるんだ」

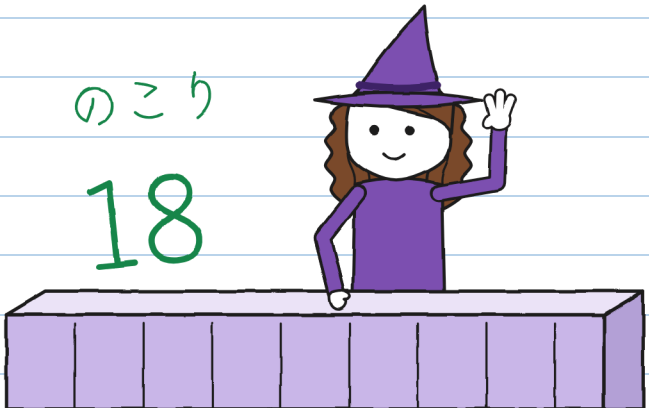


はんことわたしは、考えがちがう。 —J.

「この配達はあなたたちのもの」とマラさんは言った。
「かみなりのときと同じ。ただし、じょうけんが三つ」
マラさんは指でかぞえた：

1. あなたたちは箱を開けない。ラベルもはったまま。
2. 3番が店を出るのは、トニョがたのんだときだけ。
3. 受けとる人は、したければサインする。しなければ、夜明けに荷物はもどって、ここでは何も起こらなかったことになる。

「もしトニョがずっとほしがらなかったら？」とフリータが聞いた。
「ずっとそのままだ」



「ずっとそのまま」は期日じゃない。 —J.

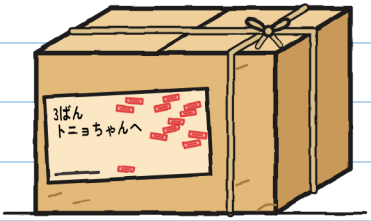
トニョは長いあいだだまっていた。フリータがストップウォッチではかった：四分。イナズマ便なら、配達のほぼ半分。

「持って帰る」とトニョはやっと言った。「とじたまま。考えるために。いまのところは」
「あなたがたのむのね？」とマラさんが聞いた。
「ぼくがたのむ」

出ていくようすを書いた。だれにも、ちがうと言わせないために：

もちだし カード

- [x] はこ：とじている
- [x] ラベル：はってある
- [x] たのむ ひと：トニョ
- [ ] サイン：まだ



外で、トニョは3番を自転車のかごに入れた。手をはなすと、鳴った：チリーン。

ハンドルの、イナズマ便のベルがついている所を見つめていた。何かを思いだしたように。
「どうしたの？」とフリータが聞いた。
「なんでもない」
自転車を手でおして、歩いて帰っていった。トニョは、ふだんぜったいに歩かない。



あの「なんでもない」は、「何かある」ってことだよ。助けなきゃ。 —J.

ドアのところから、角にイナズマ便の自転車が二台とまっているのが見えた。
「トニョ！　かごに何が入ってるの？」と、こしまでとどくおさげの女の子がさけんだ。
「配達だ」
「だれあて？」
「お客さんあて」

うそはついていない。ただ、答える前に、ラベルが自分のほうを向くように箱をまわした。



「イナズマ便の人はだめ」の意味が、やっとわかった。　—J.

その夜、ぼくは部屋のブラインドをあげたままにした。うちは店の向かい。3番がもどるなら、ぼくに見えるはずだ。

「グニ？　起きて何してるの？」とお母さんがろうかから言った。
「荷物を見はってるんだ」
「そう。でもパジャマで見はりなさい」



わたしも見はりたかった。わたしの部屋のまどは中庭に向いている。 —J.

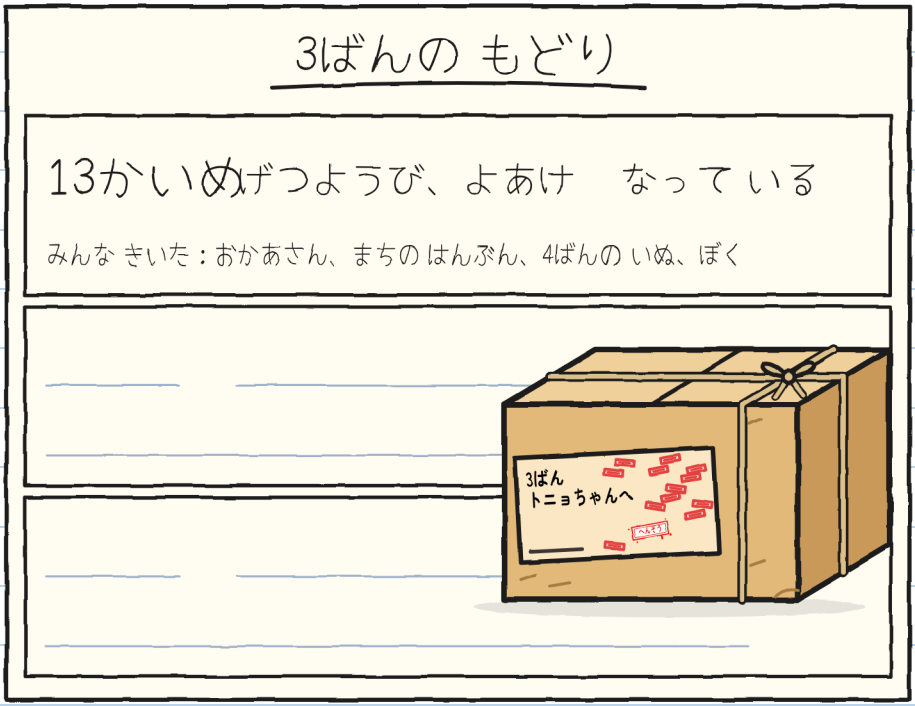
夜明けに、すがたを見せるより先に音が聞こえた。

チリーン、チリーン、チリーン。

屋根の上をゆっくりやってくる。アイスクリームの車みたいな音だ。三つのまどに明かりがついた。犬がほえた。3番は、ドアの上の小さなまどから入りこんだ。マラさんがそのためにいつも開けておくまどだ。



学校のあと、店に行った。3番はたなの元の場所にもどっていた。はんこがひとつふえて、十三になっていた。



「ばつじゃない」とマラさんは言った。「きまりだ。だれもサインしていない。だからもどる」

はんこが十三こ。このままだと、箱が見えなくなる。 —J.

トニョは五時二十分に、配達が終わってからやってきた。3番がもどったかどうかは、聞かなかった。家の上を通るのを、聞いていたのだ。

これは、ぼくは見ていない。トニョが話してくれた：

トニョが はなして くれた こと



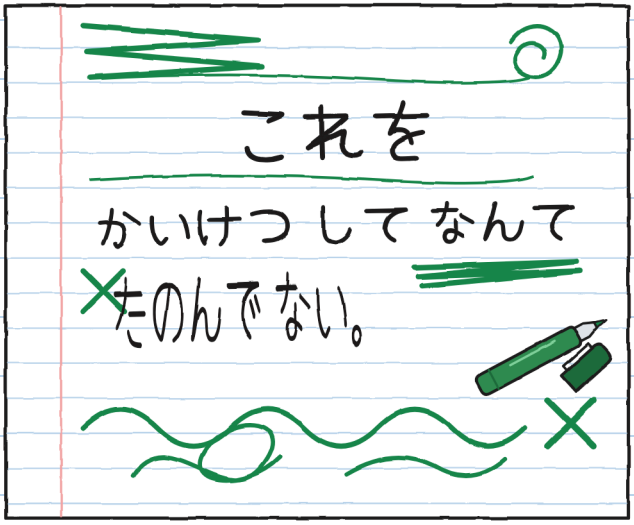
「げんかんマットにおいた。ひとばんじゅう」

「どうして家の中に入れなかったの？」とフリータが聞いた。

「うちには、ぼくをそうよぶ人がもう十分いるから」

「サインひとつで、ぜんぶかいけつするのに」とフリータは、トニョが帰ったあとで言った。「たったひとつ。二秒ですむ。ストップウォッチで、自分のサインをはかってみた」

ノートを開いて、ボールペンで強くおして書いた。緑のペンでかくされないように：



読んだよ。さんせいできない。いまのところは。 —J.

別の考えがある。そんな目で見ないで。 —J.

第 3 章

サイン

火曜日、学校から帰ると、店の前の歩道につくえが出ていた。黄色いテーブルクロスが地面までたれ、フリータの字で書いたはりがみがあり、まん中にはクロスの下にかくれたふくらみがあった。



「サイン台だよ。サインしやすくするための台」とフリータは言った。「わたし、サインを集めてるの」

「いつからサインを集めてるんだ？」

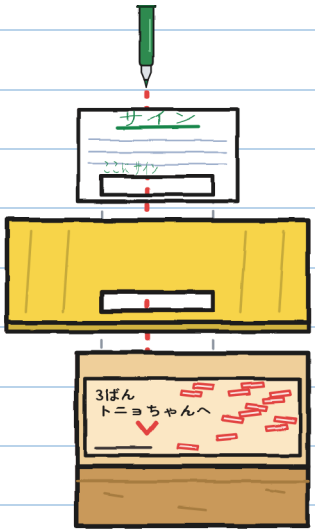
「きのうから」

サイン台の上に、せんのある紙があった。下に、はさみで切った小さなまどがある。テーブルクロスにも同じまどが、ちょうどその下にあった。
ぼくはすみを持ちあげた。サイン台は、ねかせた3番で、ラベルが上を向いていた。

しくみ

1. ちいさな まどの ある かみ。

2. あなの あいた テーブルクロス。



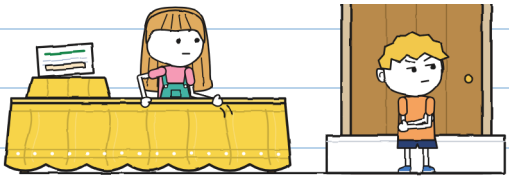
3. 3ばんの ラベルの、しろい ところ。

4. まどに サインした ひとは…… ラベルに サイン。

「わたしのペンで」とフリータは、うれしそうにささやいた。「きえないインクだよ。あしたはもうもどらない。トニョは、荷物を見せるまで知らないの。サプライズ！」

「トニョは、店から出してほしいとはたのんでいない。じょうけん2だ」とぼくは言った。
「あとでありがたがるよ」
「マラさんは？」
「電話ちゅうだった。「サインのつくえ」って言った。ほんとうにそうだし」
「サイン台は？」
「それは聞かれなかった」

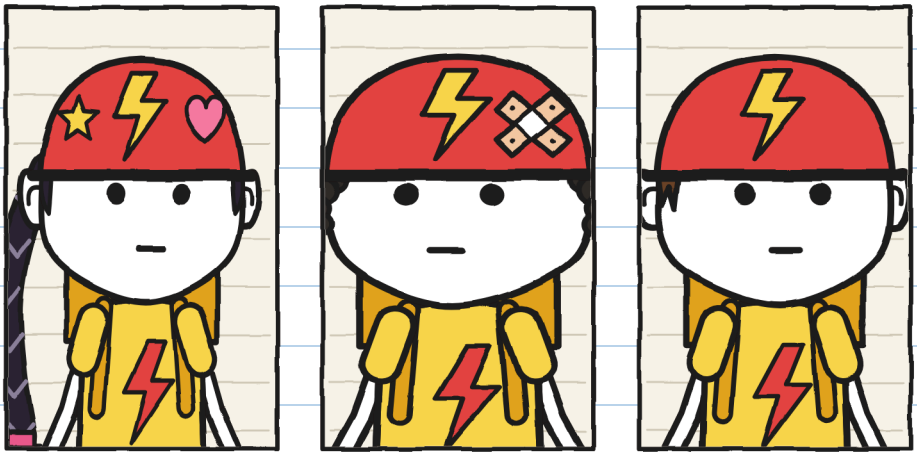
ぼくはフローラと八つめのたねのことを思いださせた。フリータはフローラに、早すぎるサインをさせなかった。
「同じじゃない。あれはとちゅうの配達だった。これは近道だよ」
「じゃあ、きみがやれば。ぼくはしない」



入口のだんにすわった。きりっとした顔で。まったく助けにならない。 —J.

イナズマ便は五時十分に、ぼくたちの通りをとおる。三人が一列になって。

イナズマびんの カード



ゾーイ、「ロケット」：
いちばん はやい。
あだなを つける。

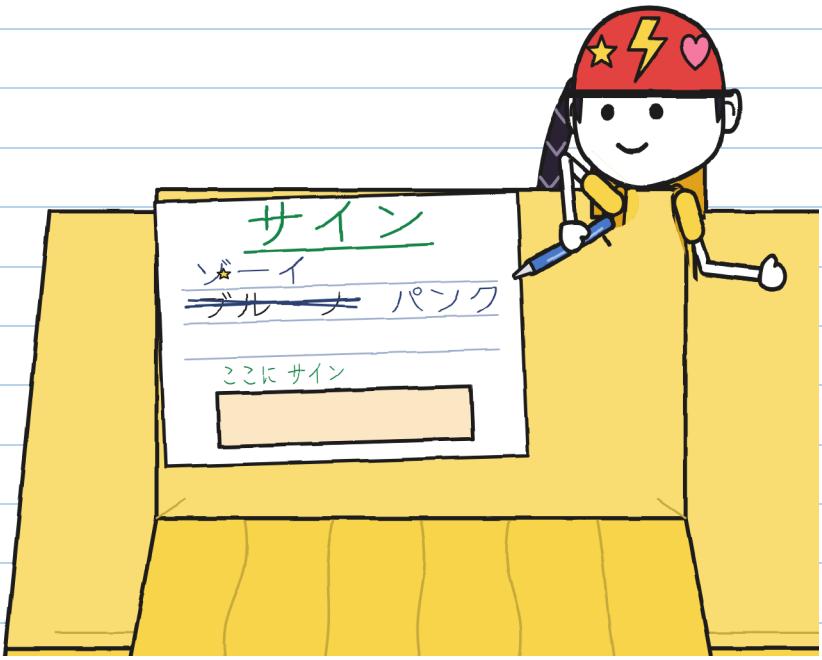
ブルーノ、「パンク」：
1かい パンクした。
2ねん まえ。

トニョ：
あだなは ない。
まだ。

「サイン？　わたしたちの？」とゾーイは言った。ブレーキをかけて、自転車からおりた。

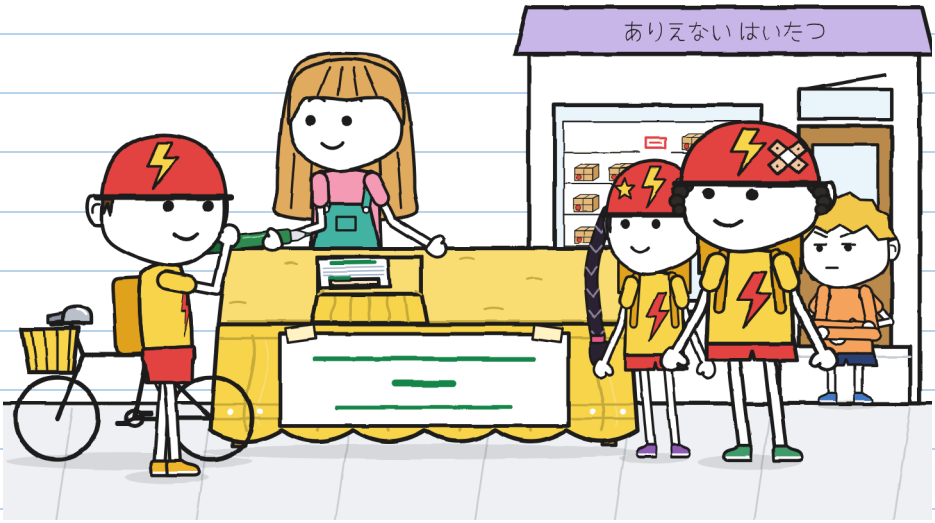
あの人たちにサインをたのんだ人は、いままでいなかった。だからうまくいく。 —J.

ゾーイが最初にサインした。名前のまん中に星を一つつけて。ブルーノは「ブルーノ」と書いた。ゾーイはそれを消して「パンク」と書いた。
「イナズマ便では、あだなは取れないんだ」とブルーノは、おこりもせずにぼくに教えてくれた。「一度パンクしたからね」



トニョは自転車から下りていなかった。日曜日に3番を見たときと同じ目つきで、つくえを見ていた。

「つぎはトニョの番」とフリータは言った。「ここの下の、わくの中。いちばん大切な場所だよ」
みどりのペンをわたした。
トニョは、サインをたのまれたことが一度もなかった。
自転車から下りて、せすじをのばした。



ぼくは入口のだんから全部を見ていた。口の中は「ぼくには関係ない」でいっぱいだった。

ぼくは立ちあがった。

「トニョ、ま……」

おそかった。トニョはサインするために、サイン台をぐいとひきよせた。すると、テーブルクロスの下で、ぼくより先に何かが口をきいた：



トニョはテーブルクロスをもちあげた。

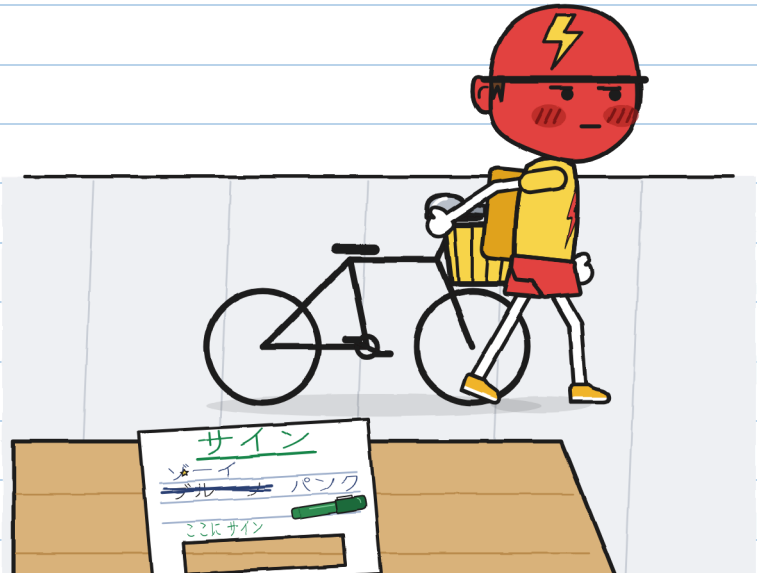


「ト・ニョ・ちゃ・ん・へ」とゾーイは、ごほうびでも発表するみたいに、ゆっくり読んだ。

「トニョちゃん？」とブルーノは言って、笑った。

ゾーイは笑わなかった。ゾーイは考えていた。

トニョはどならなかった。ゆっくりペンにキャップをして、紙の上においた。サインはしないまま。
「イナズマ便はわなにサインしない」
自転車のハンドルをつかんで、歩いて行った。だれもあとを追わなかった。



ヘルメットの色になっていた。けれど、それははずかしさの赤ではなかった。ちがう赤だった。

あかメーターには、その赤の番号がない。 -J.

マラさんはむらさき色のぬのを持って出てきた。だれがやったか、聞かなかった。たなのあいた所、つくえ、フリータを順に見た。
マラさんは3番にぬのをかけて、だきあげた。
「この荷物はとどいていない」とゾーイとブルーノに言った。「それに、ラベルになんと書いてあっても、それはトニョの問題だ」



ベルもならさずに行ってしまった。

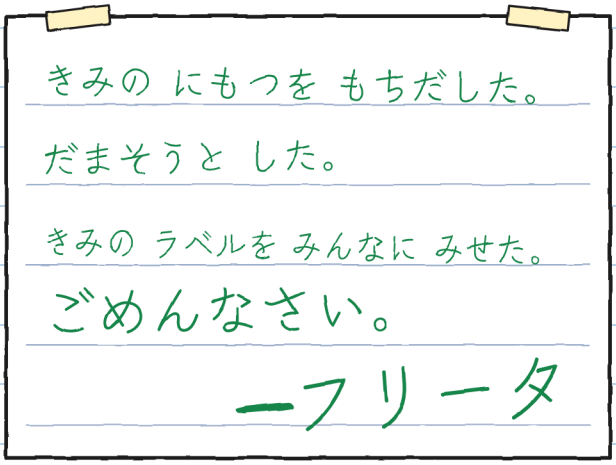
ぼくはフリータがかたづけるのを手伝った。テーブルクロス、はりがみ、サインが二つとあなのあいた紙。
「言ったとおりだろ」とは言わなかった。「たいしたことない」とも言わなかった。たいしたことだったから。
「あなたは何もしてない」とフリータは言った。
「知らせるのがおそかった。もっと早く言えたのに。マラさんをよべたのに」



それからフリータは中に入って、一人でマラさんに話した。何もかくさずに。小さなまどのこと、テーブルクロスのこと、たなのこと、電話のこと。
「トニョには」とマラさんは言った。「あなたが話しなさい」

水曜日、トニョは五時十分に、ブレーキもかけずに通りすぎた。五時二十分にも、また通った。三回目には、フリータが歩道のまん中で紙を持って立っていた。

おわび



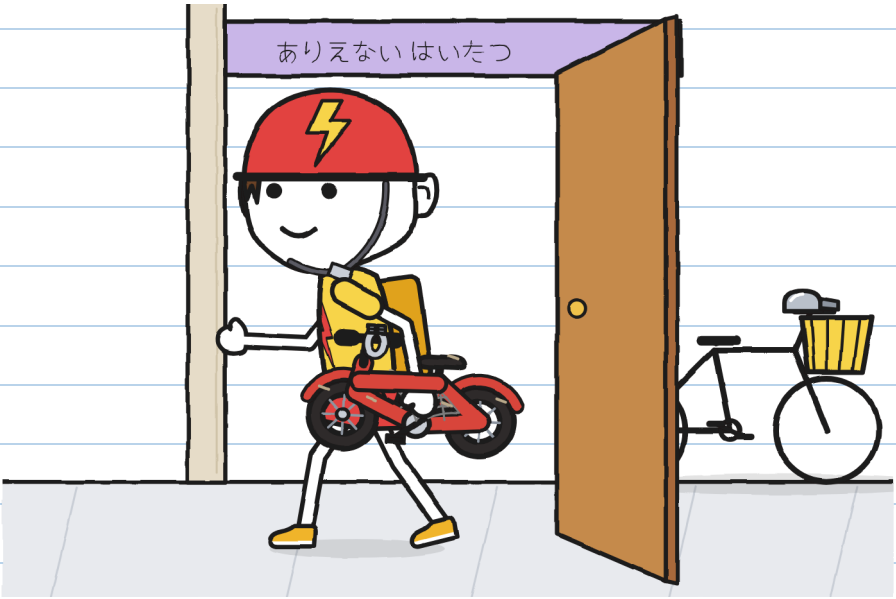
トニョは自転車から下りずに読んだ。
「わかった。読んだ」
「ゆるしてくれる？」
「読んだって言った」
その夕方、店では、トニョの箱が空っぽのままだった。

名前を全部書いてサインした。それくらいはしないと。 ーJ.

第 4 章

ちいさな じてんしゃ

木曜日、トニョは道の左右も見ずに店に入ってきた。自転車をわきにかかえていた。



いつもの自転車ではない。でも、トニョのだ。昔の。

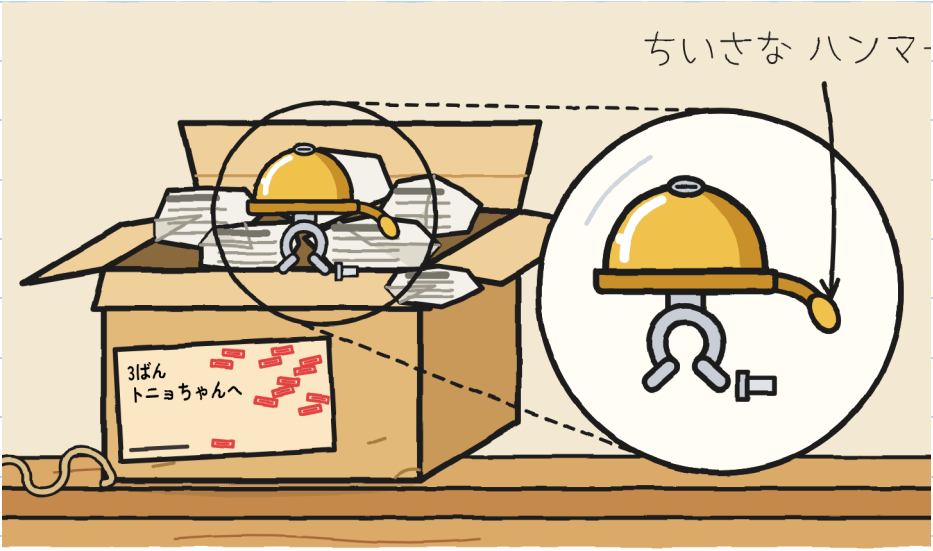
「日曜日からずっと、頭の中でチリーンが鳴っているんだ」とトニョは言った。「あれが何の音か、わかった気がする。ちゃんとおぼえているか、たしかめたい」

「あけたい。でも、ここじゃない。ショーウィンドウのない所で」
マラさんはぼくたちを店のおくの部屋につれていった。
「見るためにあけるのは、サインじゃない」とマラさんは言った。「サインがなければ、夜明けにもどる」



「いてもいい？」とフリータは聞いた。ちゃんと聞いたのだ。
トニョはしばらく考えた。
「何もさわらないなら」
「箱にも、その話にも、さわらない」

トニョはひもをほどいた。中には古い新聞紙が入っていて、ひとりでにやぶれそうなほどだった。そして、紙のあいだに……

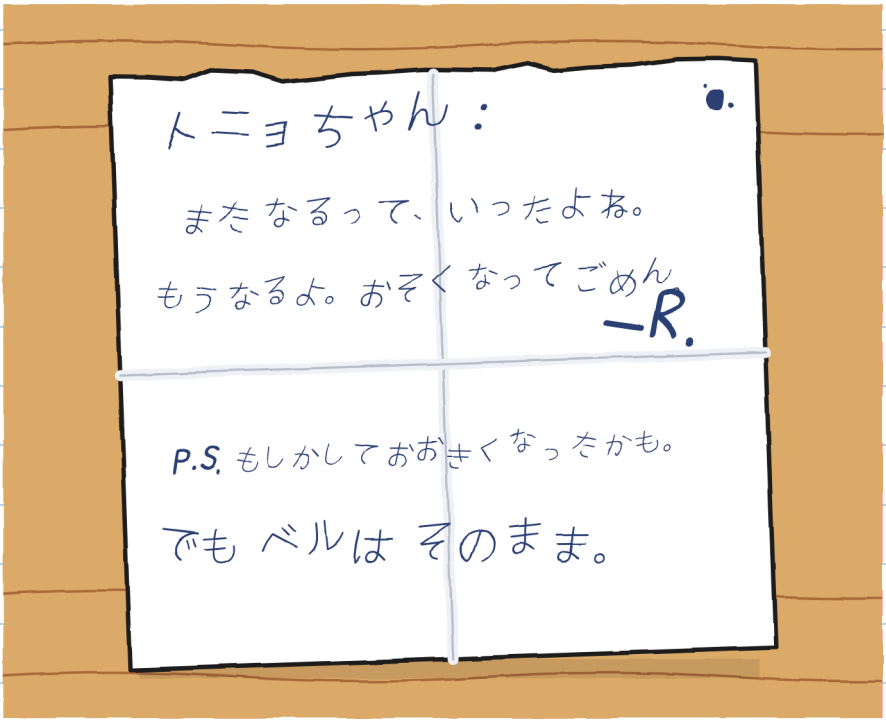


自転車の小さなベル。金色で、ばねにつながった小さなハンマーがついている。ゆらすだけで鳴る。

1番はかみついた。2番は走った。3番はただ鳴るだけ。

ドラゴンも足もない。ベルがひとつ。気に入った。 —J.

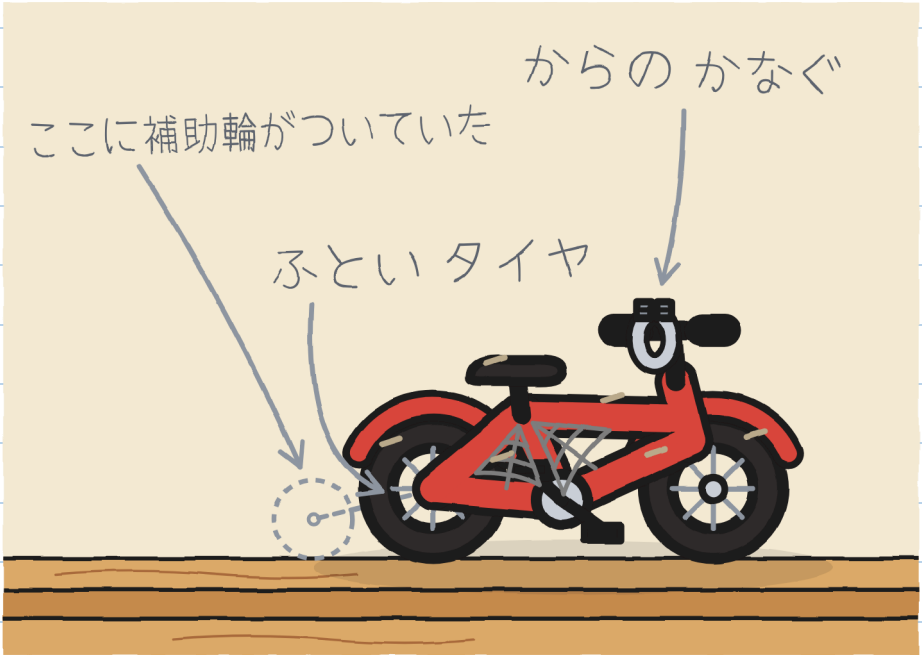
その下に、四つにおりたたんだメモがあった。



トニョは二回読んだ。
「ひどい字だな」と言った。それきり、しばらく何も言わなかった。

R.は約束をおそく守る。フローラがそう言った。どれくらいおそいか、とは言わなかったけど。 —J.

それからトニョは小さな自転車をつくえの上にのせた。

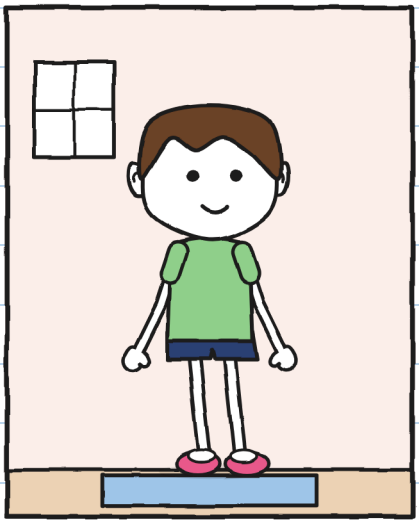


「ぼくのだった。このベルがついていた。ある日、鳴らなくなった。カチッ、と言ったきり。だれかが言ったんだ。『かしてごらん、トニョちゃん。なおして返してあげるから』」

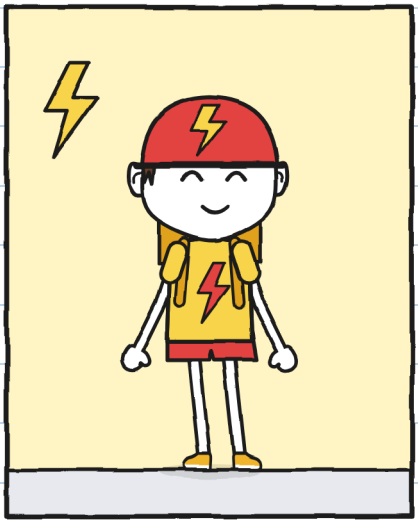
「だれが？」とフリータはつい聞いてしまって、口をおさえた。

「顔はおぼえてない。ベルはおぼえてる。それと、ずいぶん待ったことも」

「うちでは今もトニョちゃんとよばれてる」とトニョは言った。「イナズマ便ではちがう。イナズマ便ではトニョだ。最初の日に、自分でカードに書いた」
「トニョちゃんの何がいけないの？」とぼくは聞いた。
「何も。ゾーイが言うまではな。イナズマ便ではあだなは取れない。ブルーノを見ろ」



うちでは：トニョちゃん



イナズマびんでは：トニョ

「火曜日から、ブルーノはぼくをトニョちゃんと六回よんだ」とトニョはつけくわえた。
フリータはすみで小さくなった。

「まだのれる？」とフリータが聞いた。聞かずにはいられなかったのだ。
マラさんが自転車をゆかにおろした。トニョはすわった。



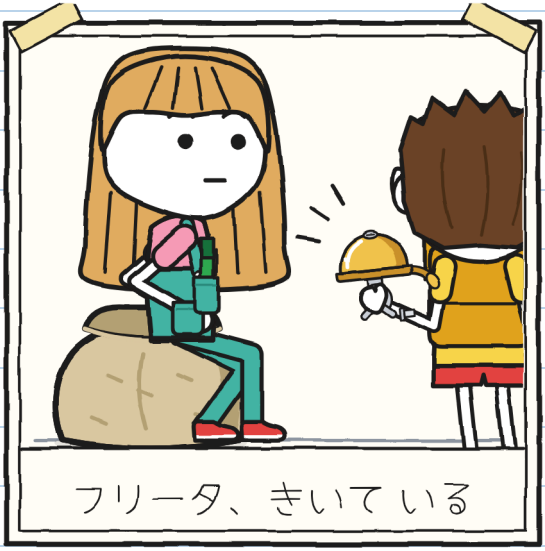
のれた。まあ、なんとか。
マラさんが、ほかの人だったら笑い声になるような音をたてた。トニョも笑った。土曜日から、トニョが笑うのを見ていなかった。

あかメーター：0。これもちゃんと数えるから書いておく。 —J.

「今の自転車には、もうベルがついてる」とぼくは言った。「イナズマ便のだ。これをつける必要はない。しまっておいてもいい。もどらせてもいい」

「知ってる」とトニョは言った。でも、ぼくを見た。まるで、だれにもそう言われたことがなかったように。

フリータはペンをしまって、十一分だまって聞いていた。





11ぷん

十一分。したがしびれた。 —J.

「ひとりで試したい」とトニョは言った。
ぼくたち三人は外に出た。トニョは、おくの部屋のドアをしめた。

フリータは、聞かないように店の反対のはしまで行った。ぼくも、聞かないように絵をかいた。トニョのいすにはもうてんがいがある。それでも聞こえてしまった。



チリーン。
土曜日と同じチリーンだった。そのあと、もうひとつ。
そして、長いあいだ何も聞こえなかった。

出ていくとき、トニョはかたほうの手にベル、わきの下に箱をかかえていた。

「あしたまで持っていく。サインはしない」

「それなら、夜明けにもどるよ」とマラさんは言った。

「もどればいい。ひとばんだけ、持っていたい」

「もしベルを箱の外におくと？」とぼくは聞いた。

「やったことがない」とマラさんは言った。「朝の7時にためすつもりもない」

トニョは、全部箱の中にしまった。



あしたまであと十四時間。数えておくよ。 —J.

金曜日、ぼくの通りにまた音がひびいた：チリーン、チリーン、チリーン。十四回目のもどりだ。
その前のことは、見ていない。トニョが話してくれた：

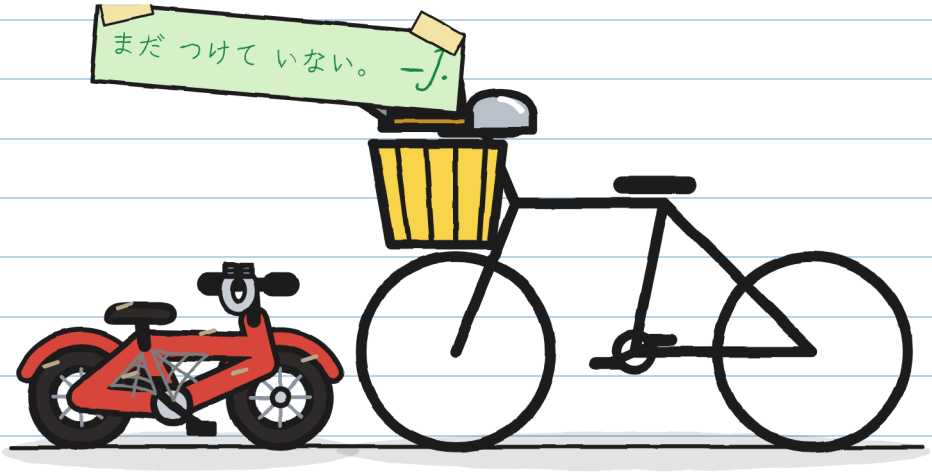


「今度は、げんかんマットじゃなく、ぼくのベッドのよこの台でねた。夜明けにガラスにぶつかりはじめたから、まどを開けてやった」

荷物にまどを開けてあげるなんて。ていねいだね。 —J.

ぼくはトニョの二つの自転車を、となりどうしにかいた。今の自転車にはベルをかきたした。とてもよくにあう。

フリータはその上に紙切れをはった。



まえ　　いま

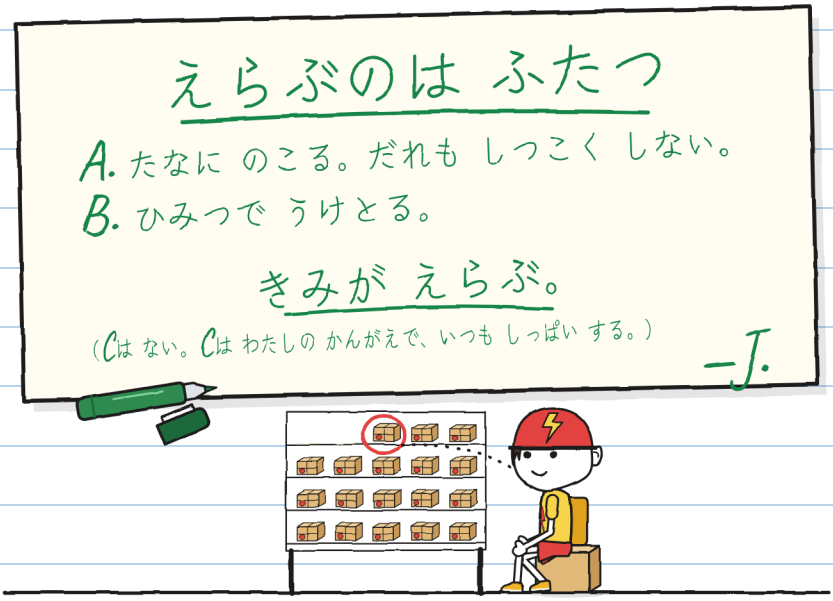
フリータの言うとおりだった。ちょっとくやしい。

第５章

ひみつの はなし

金曜日の夕方、3番はたなの上にあった。はんこは十四こ。トニョは箱にすわって、遠くから見ていた。

フリータは二日前から何かをじゅんびしていた。ぼくは、最悪のことをかくごした。
二つえらべる紙だった。



トニョは紙を読んだ。それからマラさんを見た。

「サインしたら、だれが知る？」

「わたし。それと、この引き出しから出ない記録の本」

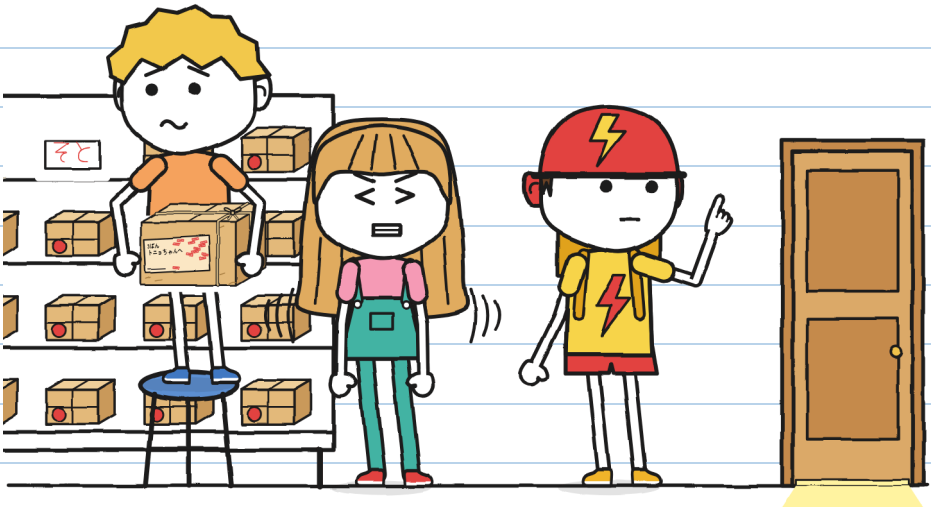
「イナズマ便には？」

「わたしからは言わない。記録ははりがみじゃない」

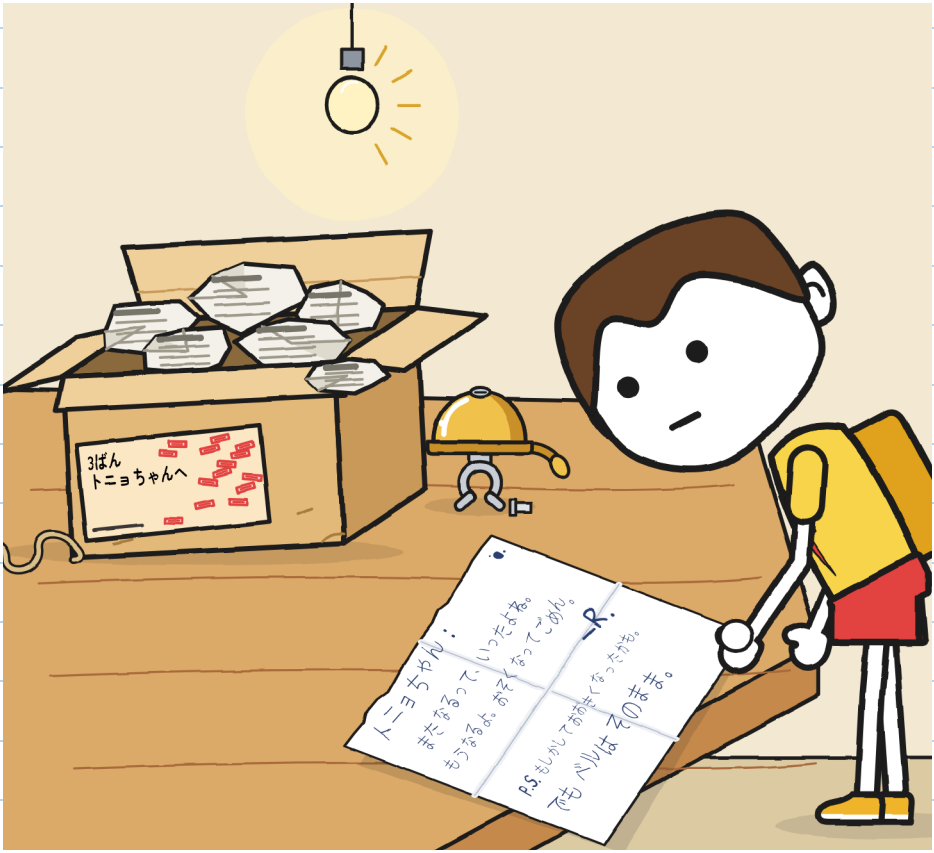


はりがみには番号だけ。名前はひきだしの中。 —J.

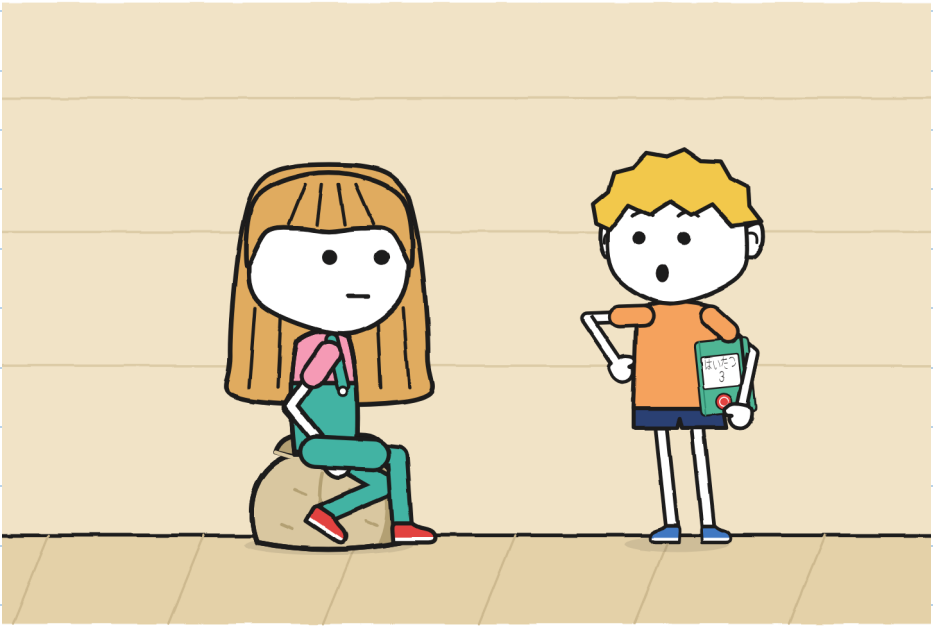
トニョは箱から立ちあがった。
「Bにする」
フリータはとびはねなかった。とびはねないのを、ぼくは見た。
「おくの部屋で」とトニョはつづけた。「それに、きみたち二人にいてほしい」
「わたしも？」とフリータが聞いた。
「いちばんぼくのサインを見たがっているのは、きみだ。前にいてほしい」



おくの部屋で、トニョはまたベルとメモを出した。おつりを数えるように、ゆっくり見た。
「サインする前に、何にサインするのか見る」と、だれの方も見ずに言った。
フリータはTシャツと同じ色になった。



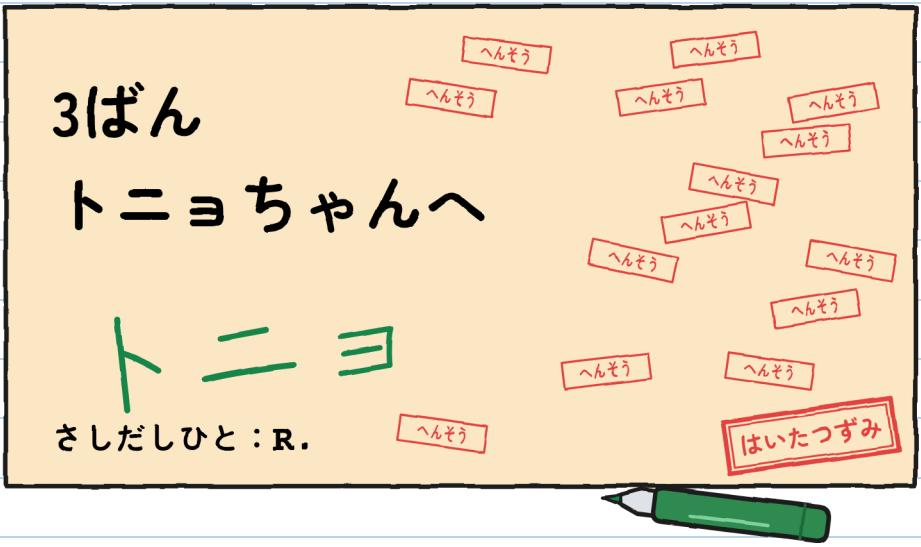
フリータはみどりのペンをトニョにわたして、すみのふくろにすわった。
「なにしてるの？」とぼくは聞いた。
「手をおしりの下にしてすわってるの。手を出さないために」



ぼくはノートをとじて、わきにかかえた。

そのあと、グニが全部書きとめた。 —J.

トニョはペンのキャップをとって、サインした。



ラベルには「トニョちゃん」、サインは「トニョ」。
「これでいいのか？」とトニョはマラさんに聞いた。
「同じ名前じゃない」
「サインするのは、受けとる人。そして、受けとったのはあなただよ」とマラさんは言った。

マラさんは配達を記録の本に書いた。フリータはもう青いふみ台を手に持っていた。それをゆかにおいた。

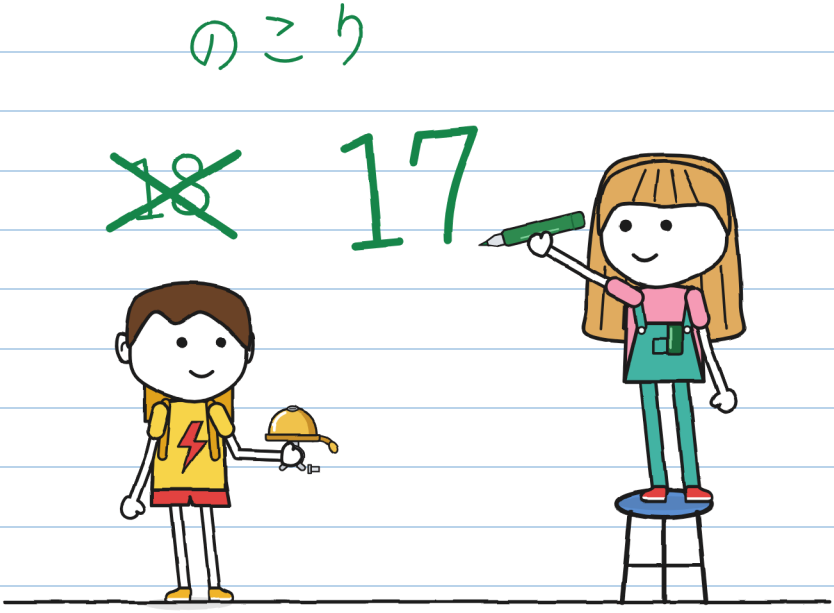
「はりがみを変えていい？」とフリータは聞いた。マラさんじゃなく、トニョに。

トニョははりがみを見た。

「数字が一つ書いてあるだけだ」

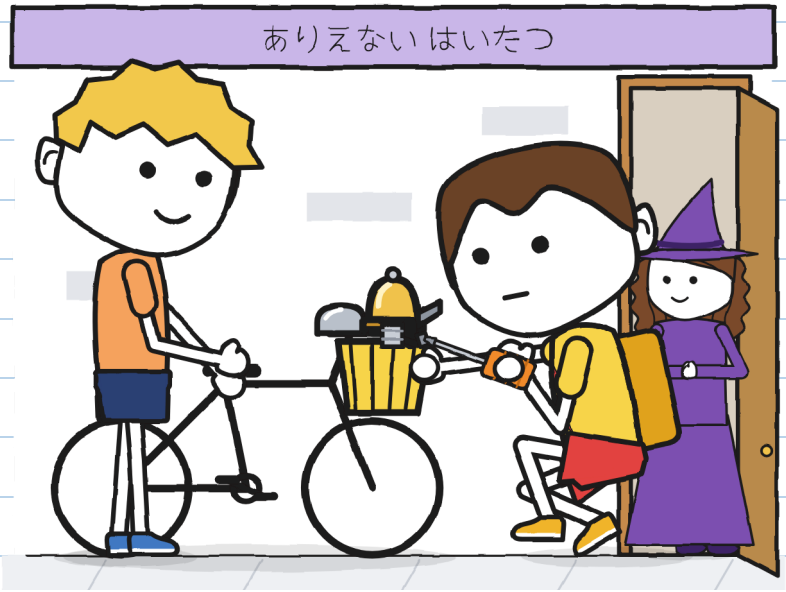
「それだけ」

「いいよ」



先に聞いたからね。覚えておいて。 —J.

トニョは外に出て、自転車をかべにたてかけ、リュックからドライバーを出した。
「つけるの？」とぼくは聞いた。
「うん」
「イナズマ便のベルは？」
「あれはイナズマ便の。これはぼくの」



ベルをつけたのはトニョだ。ぼくは自転車をおさえただけ。それも、たのまれたからだ。それからトニョは、指で小さなハンマーをはじいた。
チリーン。

五時十分にイナズマ便が通った。ブルーノがブレーキをかけた。

「なんか鳴ってるな？」

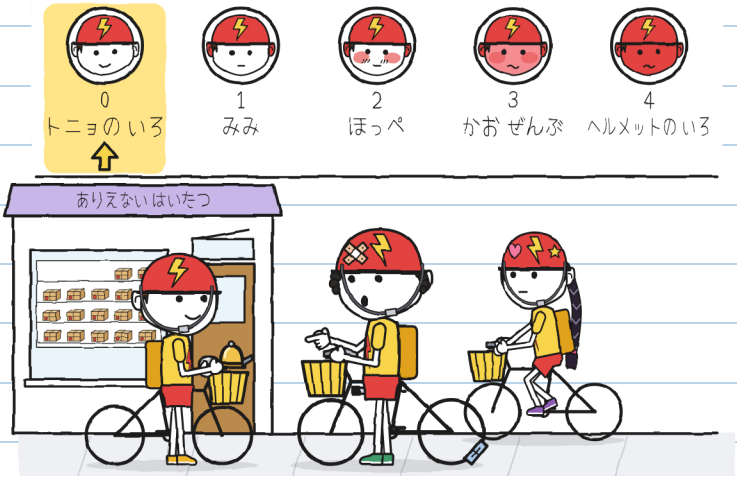
「ベルだ」

「どこの？」

「ぼくのだった」

「トニョちゃんのころの？」

ぼくはトニョの顔を見た。なんともない。耳も。



「そうよばれていたころのだ。今のぼくの名前はトニョ。きみはなんて言う？」

「パ……」ブルーノは言葉をのみこんだ。「ブルーノ」

「じゃあ、ブルーノだな」

ブルーノは頭をあげた。イナズマ便では二年、だれもかれをブルーノとよんでいなかった。

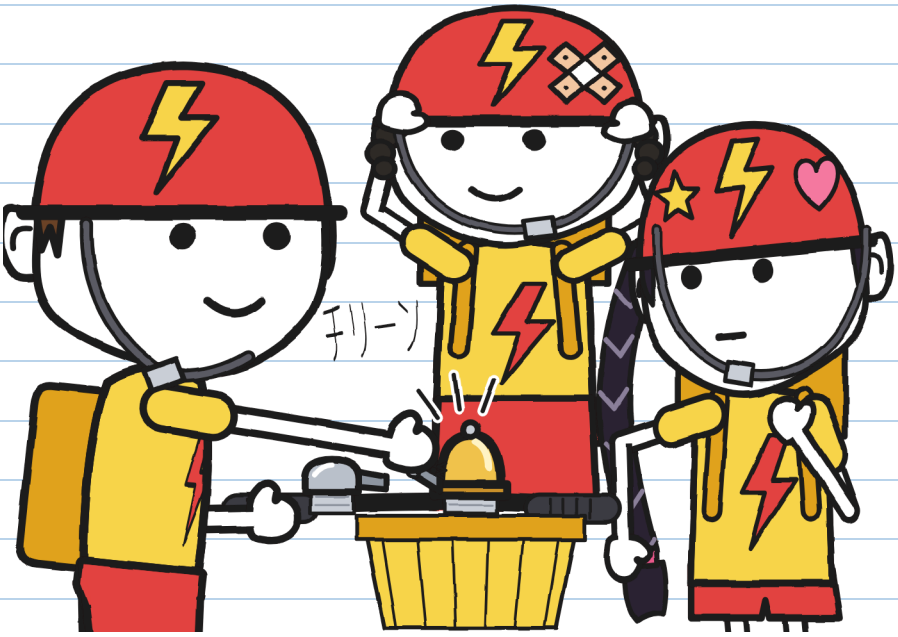
ゾーイが口をあけた。

トニョは小さなハンマーをはじいた。一回だけ。

チリーン。

ゾーイは口をとじた。ちょっと考えた。

「いい音」とゾーイは言った。「おくれるよ、トニョ」



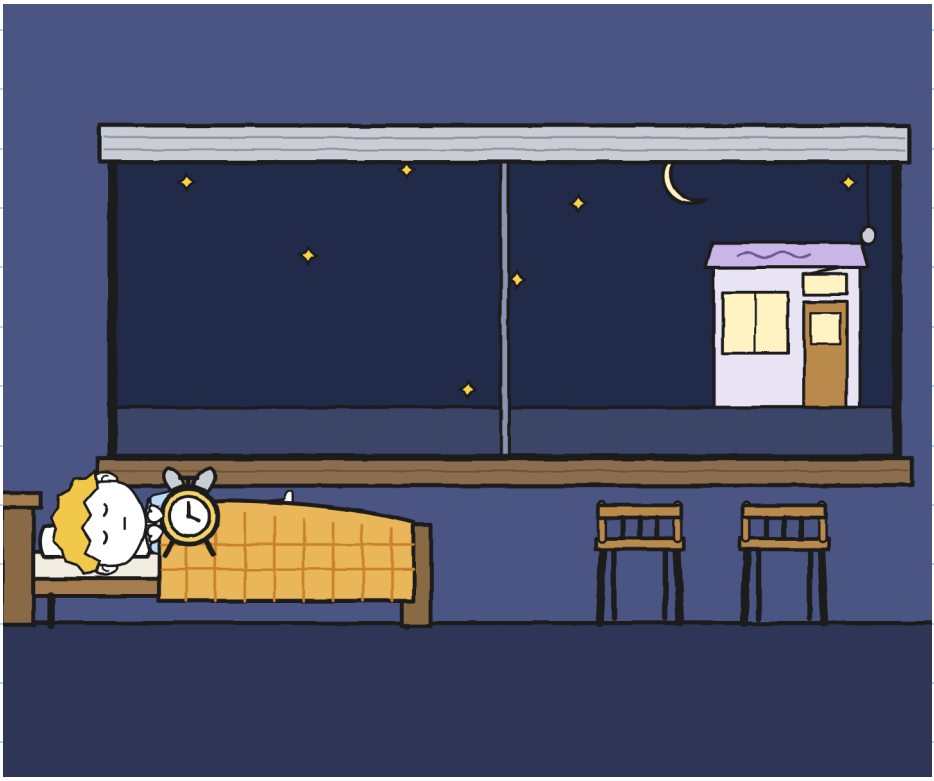
「トニョ」と言った。何もつけたさずに。 —J.

その夜、ぼくはまたブラインドをあげたままにした。

「また見はり？」とお母さんが聞いた。

「今日は、何も起こらないことを見はってるんだ」

「それは、わたしがとくいよ。さあ、ねなさい」



ペンのキャップをあけたままねてしまった。まくらが緑になった。 —J.

夜があけた。

何も鳴らなかった。

チリーンも、まどが開く音も、4番の犬も。

ぼくの通りで聞いたなかで、いちばんすてきな静けさだ。

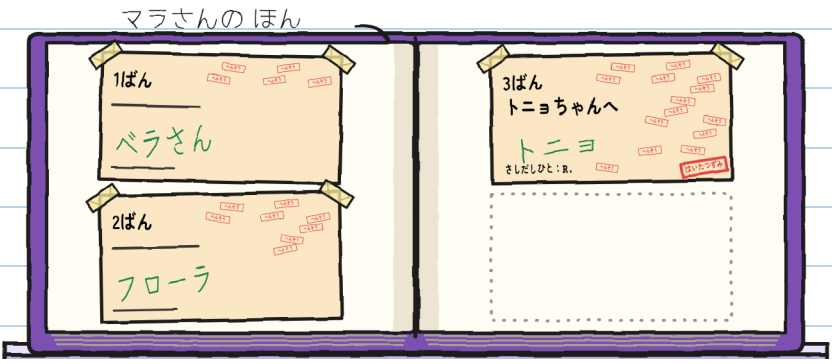


第 6 章

いまのところ

土曜日の十時に、たなをかいた。荷物は十七こ、空きは三つ。

マラさんはラベルを記録の本にはった。ほかの二つといっしょに。



たまご、たね、ベル。三つともおくれてとどいた。三つともとどいた。

三つめはトニョがサインした。今度は、わたしはペンをわたしただけ。 —J.

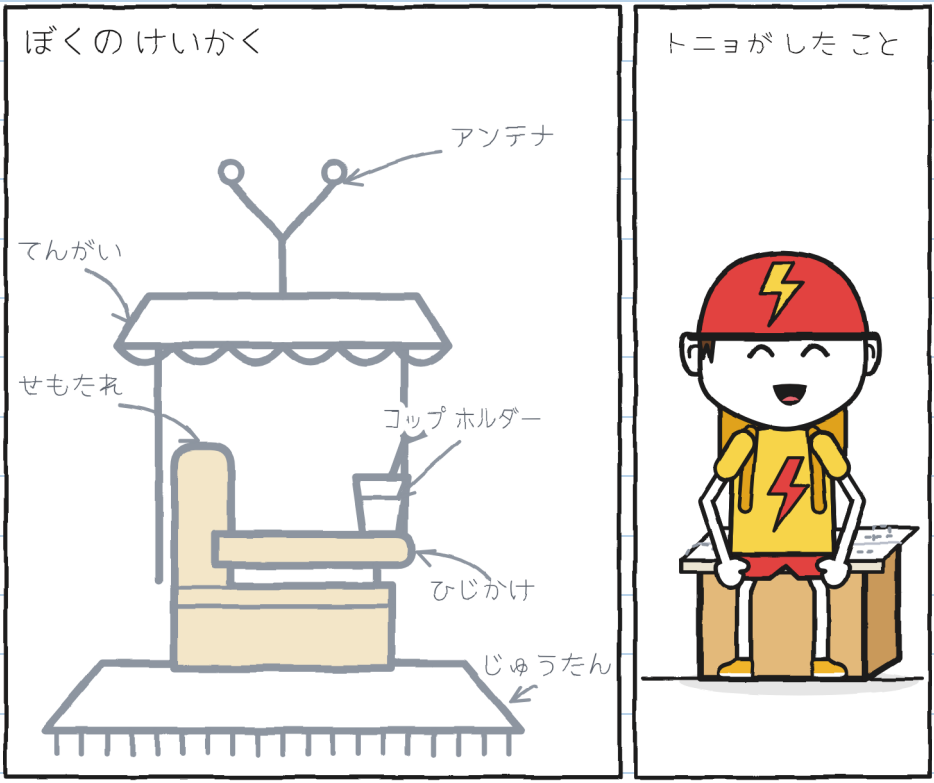
トニョは箱にすわって、もぞもぞ動いた。今度はたなを見なかった。
「その箱は、まだ「いまのところ」のままだよ」とマラさんは言った。
「いまのところは、これでいい」とトニョは言った。

のこり
17



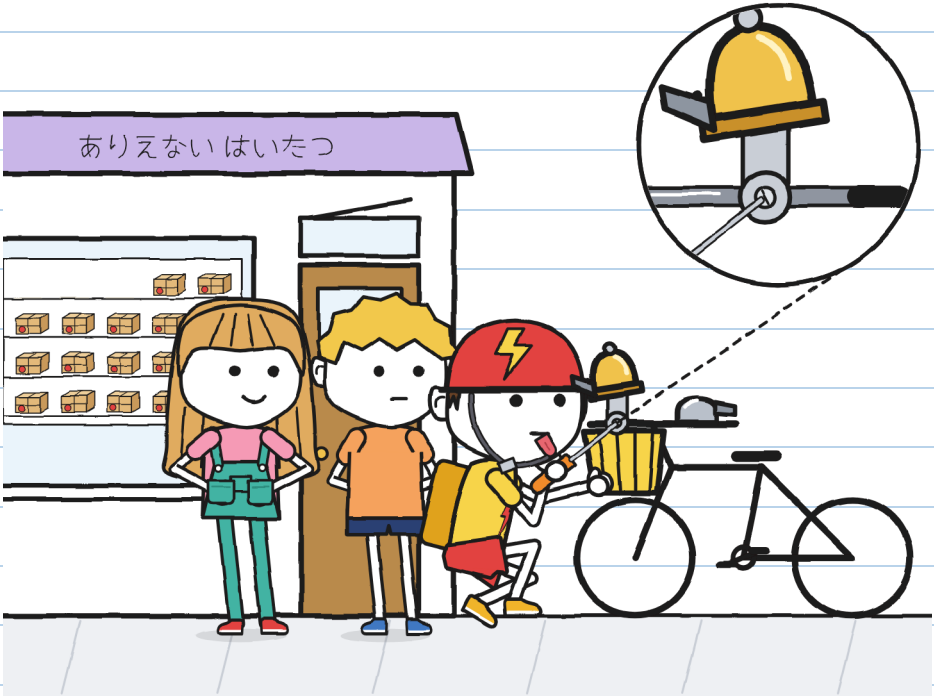
「いまのところ」は何年もつづくことがある。3番に聞いてごらん。 —J.

トニョに、トニョのいすの計画を見せた。一週間かけてつくった計画だった。



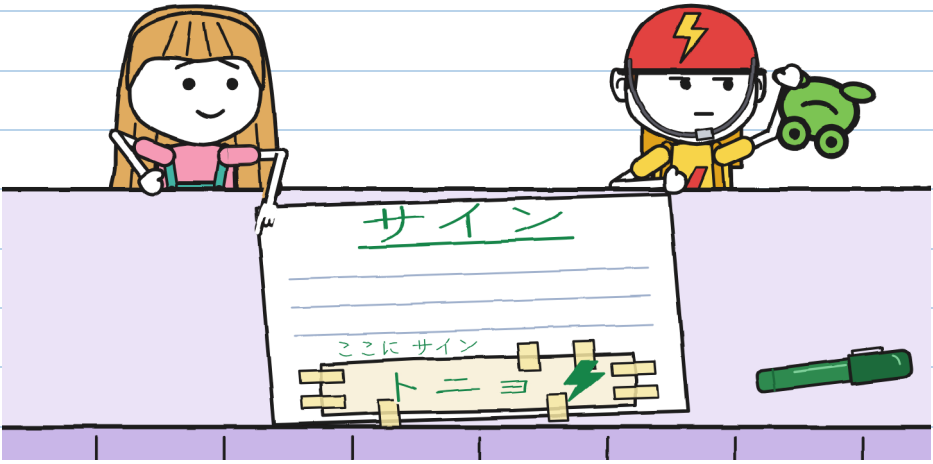
「それ、もらっていい？」とトニョは言った。
四つにおって、箱の上におき、その上にすわった。

外で、ベルがハンドルになな めについていた。
「しめる間おさえてあげる」とぼくは言った。
「ひとりでできる」
トニョはできた。ぼくはそのねじを見ていた。百回まわりそうだった。



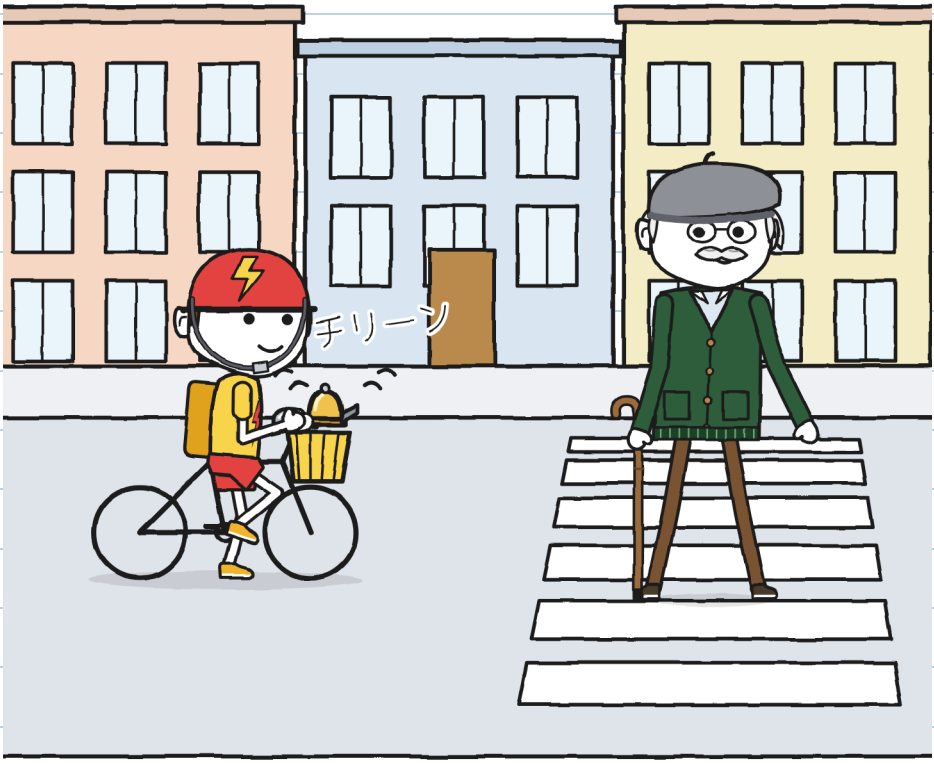
フリータはサインの紙を出した。小さなまどは、紙のふたとたくさんのテープでふさいであった。

「わなのだよ」とフリータは、マラさんが聞く前に言った。「なおした」
それをトニョの前においた。
「サインをくれる？　ほんもの。下になにもないから」
トニョは紙の下を見た。カウンターの下も見た。カエルをひっくりかえした。
「いいよ」



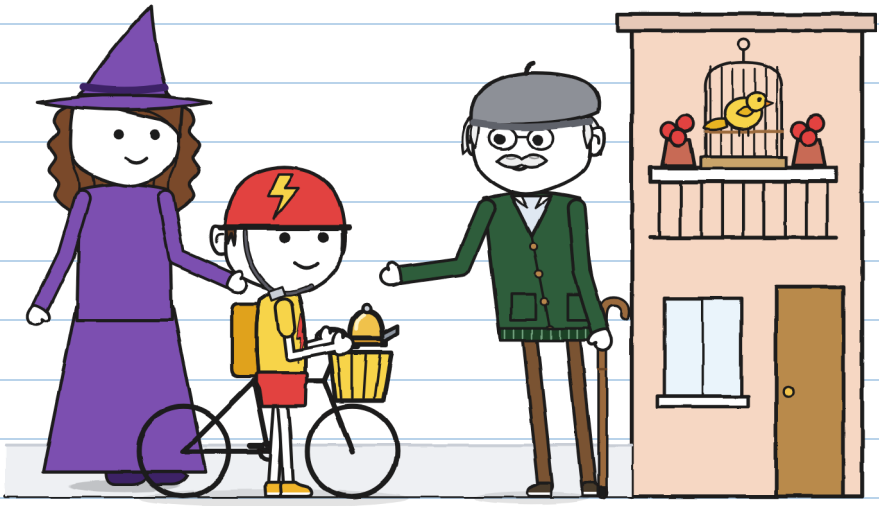
当然だよ。 -J.

お昼、トニョは配達に出た。つえをついたベレーぼうのおじいさんが、道をゆっくりわたっていた。
トニョはブレーキをかけて、待った。それからベルを一度だけ鳴らした。そこにいることを知らせるために。
チリーン。

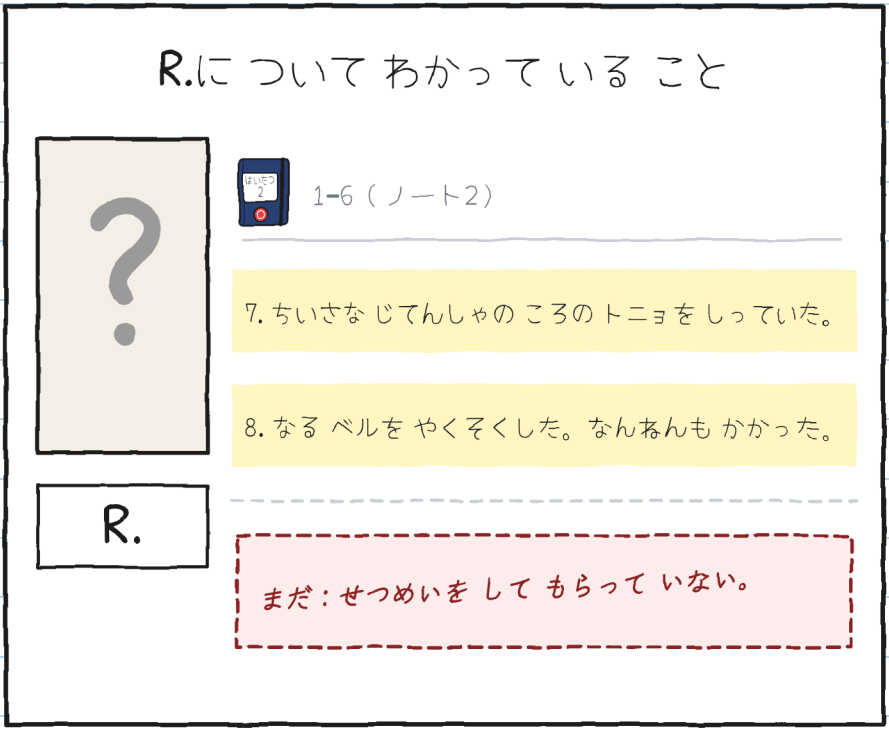


おじいさんはつえをあげてあいさつして、自分の歩く速さで進んでいった。

「アントニオさんよ」とマラさんは言った。「わたしのリストの、トニョちゃん二番目」
「そのベルは新しいのかい？」とおじいさんは、ぼくたちの通りに来てから聞いた。
「古いです」とトニョは言った。「ぼくのでした。トニョちゃんとよばれていたころの」
「わたしをそうよぶ人は、もう六十年いない。よかったら取りかえよう：きみがアントニオさん、わたしがトニョちゃん」
トニョは考えた。
「いまのところ、いいえ」



ぼくはR.のカードを出した。手がかりはもう六つあった。ぼくは二つ書き足した。トニョがボールペンをかしてと言って、その下に自分の字で書いた。



「お礼は言わないの？」とフリータが聞いた。

「お礼ともんく。両方だ。だれに言えばいいのか、わかったらね」

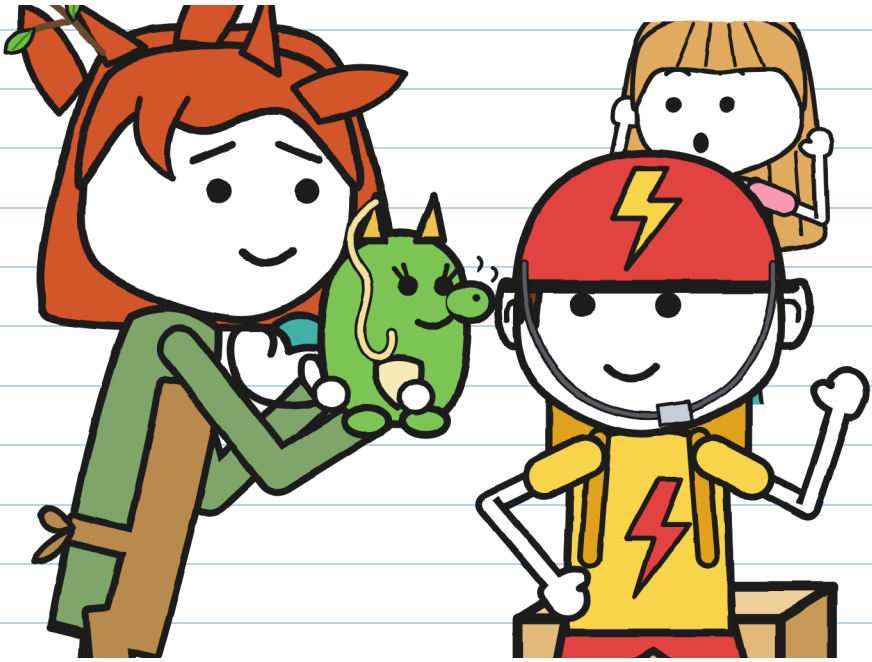
一時にベラさんが入ってきた。パンくずをだいて、かみに小さなえだをつけていた。
「たすけてほしいの。パンくずはもう飛べる。今は、おりるための安全な場所がいるの」ベラさんは少しだまった。「きのうは、わたしのスープをえらんだの」



パンくずはぼくを見て、ぼくの「ぼくじゃない」の顔をした。

あなたの顔、そっくり。めんもついてる。 —J.

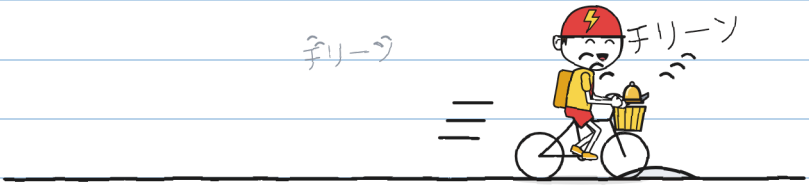
「速い人がいる？」とトニョは箱の上から聞いた。
「待てる人がいるの」とベラさんは言った。
「ぼくも待てる。今週から」



わたしも待てる。もういい？ —J.

3番の配達。それぞれがかかった時間：

	イナズマびん：10ぷん。
	R.：なんねんも。
	トニョ：むいか。
	フリータ、きいている：11ぷん（さいこうきろく）。

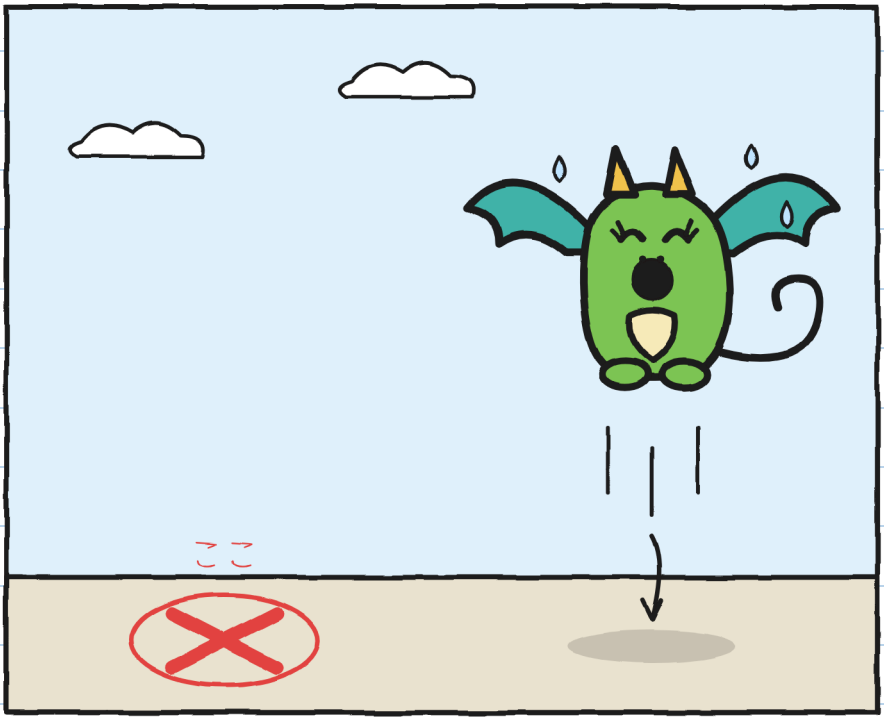


トニョは配達に出かけた。通りからチリーンと聞こえた。もうひとつ。
今度は、トニョがベルを鳴らしていた。

わたしはまだ、ひとりで鳴っている。練習中。 —J.

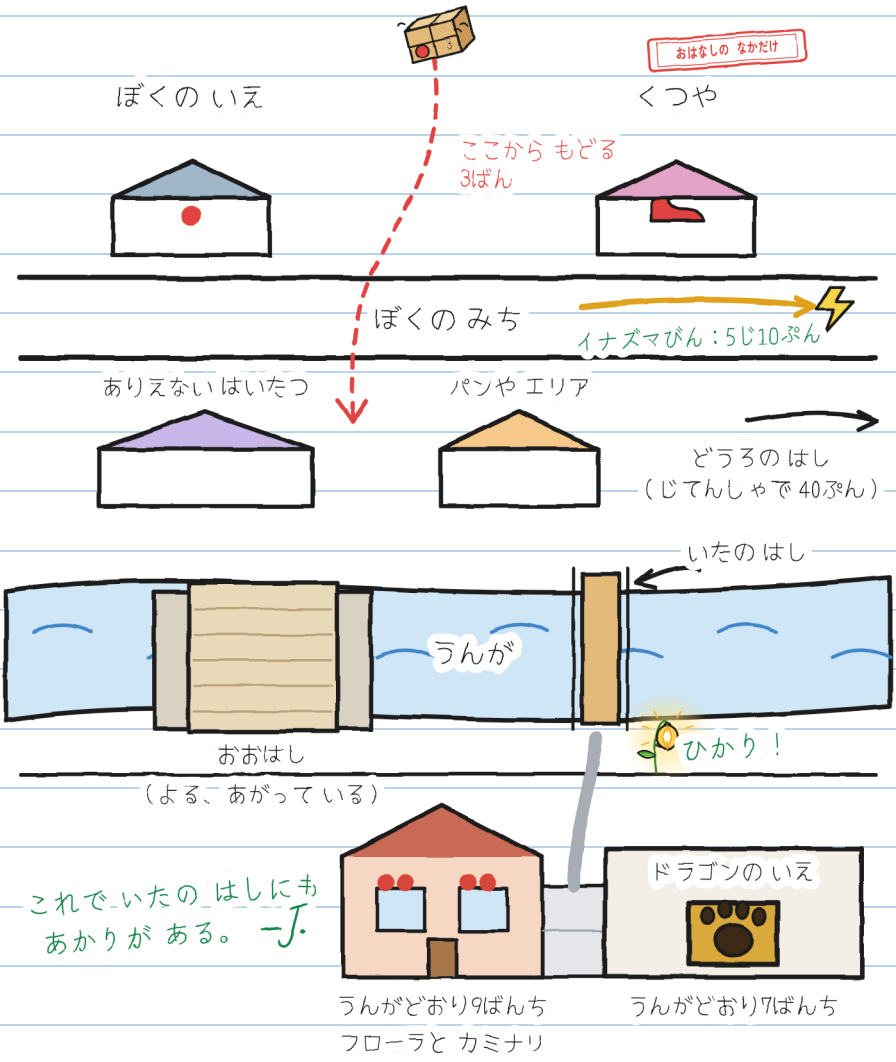
ありえない はいたつ ・4

（もうすぐ）



あなたのまねをするドラゴンの子は、どこにおりるのかな？ ーJ.

まちの ちず　その3


おはなしの なかだけ
ぼくの いえ
くつや
ここから もどる
3ばん
ぼくの みち
イナズマびん：5じ10ぷん
ありえない はいたつ
パンや エリア
どうろの はし
（じてんしゃで 40ぷん）
いたの はし
うんが
ひかり！
おおはし
（よる、あがって いる）
これで いたの はしにも
あかりが ある。 -J.
ドラゴンの いえ
うんがどおり9ばんち
フローラと カミナリ
うんがどおり7ばんち

きみは なんて よばれる？

トニョは、トニョちゃんとよばれていた。今は、自分でなんとよばれるかを選ぶ。きみは？

こう よばれるのが すき……

こうも よんで いい……

こうは よばれたく ない……

わたしはフリータ。「J.」は、サインするときだけ。 —J.

ひとつの おはなし、むっつの サイズ

サイズは六つあって、3さいから16さいまで。ことばは20いじょう。**XXS**、**XS**、**S**、**M**、**L**はページも絵も同じ。**XL**は小説。ちがうのは話し方だけ。

サイズ XXS · PRE-A1
マラさんと トニョが わらう。あかい じてんしゃが みえる？

サイズ XS · A1
マラさんは わらいそうに なった。トニョも わらった。どようびから ずっと わらって いなかった。

サイズ S · A2
マラさんが ふっと おとを たてた。ほとんど わらい だった。トニョも わらった。土曜日から トニョが わらうのを 見て いなかった。

サイズ M · B1
マラさんが音をたてた。笑い声みたいだった。トニョも笑った。土曜日から、トニョが笑うのを見ていなかった。

サイズ L · B2
マラさんが、ほかの人だったら笑い声になるような音をたてた。トニョも笑った。土曜日から、トニョが笑うのを見ていなかった。

サイズ XL · B2-C1
イラスト小説 · 13+
CEFRのレベルは目安です。

どのサイズも、同じチリーン。 —J.

おうちの ひとと せんせいへ
linguaula.comで しょうごとに れんしゅう

本物の自転車：やること

1. ヘルメットはいつも、しっかりとめる。「すぐそこまで」のときも。
2. 見えるように、聞こえるように：ライト、明るい色の服、ベル。ベルは知らせるもの。命令するものではない。
3. 両手でハンドルをにぎる。何かに気をとられたら、安全な場所で止まる。
4. 歩道は歩く人のもの。そこでは自転車を押して歩く。道をわたる前は、止まって、見る。

「おはなしの なかだけ」のはんこは、おはなしでは起きても、道では起きないことにおす。

でかける まえに、じてんしゃを みよう

